

第2学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「ことばあそびをしよう」 教材名「ことばあそびをしよう」

2 単元の目標

言葉遊びの音や意味のきまりに気付き、言葉の豊かさを感じられる。相手の言葉を聞いて、受け取った音や意味に合う言葉を返せる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①言葉遊びの音や意味のきまりに気付き、言葉の豊かさを感じている。 (〔知識及び技能〕(3)イ)	①「話すこと・聞くこと」において、相手の言葉を聞いて、受け取った音や意味に合う言葉を返している。(A(1)オ)	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

言葉遊びの音や言い方のきまりを確かめ、聞き手に伝わるように話す。速く言うことだけを目標にしない。学習指導要領のA(1)オを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(3)イを、言語活動の中で確かめる。年間計画の重点は知識・技能であり、本案ではそれを使う言語活動の関連項目としてA(1)オを加えている。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

教科書で示される遊びを手元で読み、同じ音や似た音の箇所を確かめる。本案では児童が知る語を並べた短い自作の言葉も使い、ゆっくり言う時と速く言う時の聞き取りを比較する。おおむね満足できる状況は、相手の言葉を聞いて、受け取った音や意味に合う言葉を返しているという姿で捉える。使った言葉を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○遊びのきまりを確かめて言葉を出す。相手の言葉を受けて続ける。	学習状況を見て支援する。
	2 （本時）	○意味と音を確かめながら例を増やす。気付いたきまりを紹介する。	知①・思①（発言・学習記録）



6 本時の指導 (2/2)

(1) 本時の目標

相手の言葉を聞いて、受け取った音や意味に合う言葉を返せる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・ 予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「どの音に気を付けると、言葉が聞き手にはっきり伝わりますか」 【めあて】言葉遊びの音や言い方のきまりを確認、聞き手に伝わるように話す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 似た音が続く所で言い間違えた。	本時に考える対象を確認し、既に分かったことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「どの音に気を付けると、言葉が聞き手にはっきり伝わりますか」 教科書で示される遊びを手元で読み、同じ音や似た音の箇所を確認める。本案では児童が知る語を並べた短い自作の言葉も使い、ゆっくり言う時と速く言う時の聞き取りを比較する。 自分の語や文、話し方を試し、相手が受け取った内容と比べる。直す箇所を自分で選び、理由とともに記録する。 交代して言葉を出し、聞き取った音や意味を確認めて応答する。きまりに合わないと感じたら、どの音や意味が違うかを伝え、相手の説明を聞いて確かめる。 〈予想される児童の反応〉 ・ 似た音が続く所で言い間違えた。 ・ 区切ると聞き取りやすかった。 ・ 速く言うより相手に伝わる方がよい。	教科書で示される遊びを手元で読み、同じ音や似た音の箇所を確認める。本案では児童が知る語を並べた短い自作の言葉も使い、ゆっくり言う時と速く言う時の聞き取りを比較する。 想定するつまずき：言葉の意味を知らないまま音だけで答える、速い児童だけが活動する。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 相手の言葉を聞いて、受け取った音や意味に合う言葉を返している。(発言と学習記録) ◎知① 言葉遊びの音や意味のきまりに気付き、言葉の豊かさを感じている。 (〔知識及び技能〕(3)イ)(使った言葉・音読や表記の確認)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって分かったことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・ 速く言うより相手に伝わる方がよい。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った具体的な言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確認める。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に教材名とめあて、その左に問い「どの音に気を付けると、言葉が聞き手にはっきり伝わりますか」。中央は児童が使った語や文の例を並べ、確かめる箇所に印を付ける。その左に直す前と後の表現を並べ、変えた理由を線で対応させる。左端に、今日確かめた言葉の使い方を児童の言葉でまとめる。縦書きで右から左に学習の順をたどる。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

